

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

Vol.14 2022年1月28日発行

『プロジェクトを振り返って』

大澤 諭樹彦（国際リハビリテーション研究会監事

浴風会 老健くぬぎ）

巻頭言

CONTENTS

【巻頭言】

『プロジェクトを
振り返って』
・大澤 諭樹彦

【特集】

JSIR第5回学術大会
・広田 美江
・玉利 光太郎
・プレブドルジ
デルゲルザヤー
・永尾 悠

【コラム】

『世界のめがね』
・山本 啓太

【お知らせ】

JICA専門家として大切にしていた事は、自分自身の“外部者性”としての立場です。プロジェクトでは、配属先の国立リハビリテーション病院のサービス改善を図りつつ、ミャンマー全体のリハビリテーションの質向上を進めていました。当然スタッフとの難しい調整もありましたが、その時には彼らの話を丁寧に聞きながら、やりたいことを実現できるように計画を練っていきました。私は一時的にミャンマーに滞在し、プロジェクト終了後に帰国する存在です。私の帰国後には、プロジェクトの成果は彼らの運用しやすい形に変わり、消えるものと、根付いていくものがあると考えていました。そのため、プロジェクト終了に向けては、現地スタッフが将来の事業運用をイメージできるように話し合いを進めました。

ミャンマーの政情が不安定になり、プロジェクトの変容を確認することは難しくなりました。日に日に悲惨なニュースが多くなり、心が痛くなります。当時関わった人達と再会して、プロジェクトのその後を確認し合える日が来ることを祈るばかりです。

帰国し8年が経ちますが、この外部者性の感覚は薄れることなく、日本での職場でも活かされています。当事者として事業に参画しつつ、外部者としての感覚を働かせながら冷静な目で判断するよう心掛けています。プロジェクトを振り返ってみると、自分自身も変化（成長）していたようです。

2022年が皆様にとって平和な年になることを祈念しています。

特集

国際リハビリテーション研究会第5回学術大会 ～変化と深化 拡大する国際リハビリテーションの領域～

開催報告

広田 美江（大会長 国立病院機構 別府医療センター）

国際リハビリテーション研究会第5回学術大会は、コロナ禍の中、福岡の地から全国の皆さまに発信する形で、滞りなく終了したことをご報告いたします。



オンライン型開催として43名の皆様のご参加とご協力により、感染の大波の合間ではありますが、無事に終了できたこと心より感謝申し上げます。本来九州での学術大会は、昨年度ペルー理学療法士を招き福岡で行う予定でございましたが、突然のコロナ禍で1年延期となりました。今年度も世の中の動向を見ながら対面での開催を模索しておりました。結局、直前にオンラインへと変更となり皆様へは多大なるご迷惑をお掛けしたことが、改めてお詫び申し上げます。

本学術大会では「変化と深化：拡大する国際リハビリテーションの領域」をメインテーマとしました。この数年新型コロナウイルスの出現によって、私たちの生活や社会における考え方もが一変いたしました。国際協力の分野でもJOCVが日本への帰国を促される事態となり、活動に混迷が生まれました。しかしながら、これらの事も従来の流れから未来へと新しいチャレンジを考える示唆なのかもしれません。世界は少しずつ動き出しています。今回、各方面の演者の方々から現状報告や今後の展開について実例を交え論じていただきました。質疑応答も活発に行われ、まさに大会のテーマを具現する印象をうけました。ひと時ではありましたが、電波に乗って九州に集い、再び国際リハビリテーションの大海原に向かって船出する。皆様にはこれまでに蓄えた力を起爆剤として、国際リハビリテーションの分野において思う存分発揮していただければと存じます。

ここに第5回学術大会の日程が無事終了しましたことをご報告させていただきます。大会を大いに盛り上げていただきました皆様に重ねて心より御礼を申し上げます。この大会が国際リハビリテーションの研究と活動の一層の発展に繋がることを祈念し、お礼の挨拶とさせていただきます。

ペルーでの研究支援活動の紹介と課題

玉利 光太郎 (帝京平成大学 健康メディカル学部)

世界銀行の2019年の統計によると、ペルー一人一人当たりの年間収入は平均6,740米ドルとされ、日本の41,710米ドルと比較すると約6分の1です。このようにペルーは中進国に該当しますが、実際に首都リマ市に赴任してみると、道端やバスの中で物乞いをする小学生もいれば、高級レストラン街で飲食を楽しむ富裕層も混在する国でした。保育園児を含めた家族5人で2年間住みましたが、通常の生活に困ることは無かったですね。



2013年6月の赴任当初、私は3次元動作解析装置VICONを用いた研究活動を、国立障害者リハビリテーションセンター（以下INR）にて行う派遣計画の下で赴任しました。しかし「協力隊あるある」の例にもれず、動作解析装置を設置する予定の研究所退任時まで未完成で、派遣計画はゼロからのスタートとなりました。その後1年間は研究支援活動ができず、その間できたことといえば、ペルー人とサッカーや食事会を通して国際交流を深めたりしながらが...つまるところは飲んで鬱憤を晴らすことしかない1年でした。1年が経過し、私は研究教育支援室に配置替えとなりました。新しいカウンターパートとともに同センターの研究活動を底上げするための活動を支援することとなり、ようやく支援活動らしいことを始めることができました。まずは研究活動がとん挫しているスタッフへの統計や論文の書き方のマンツーマン指導を行いました。1年後には帰国する身です。そこで、同時進行でカウンターパートを講師にした統計や研究デザインに関する研修会を企画しました。カウンターパートは博士課程に在籍しており、一定の知識がありました。その彼女が教えながら学んでいくスタイルをとることで、永続的に院内研修を企画・実施できる土台を作ろうと思ったのです。研修会は1年間で30回以上も開催することができ、一定の成果を残せたと思います。

現在INRの研究活動は徐々に論文などの成果物を発表できる体制になってはいますが、まだ国際協力が必要な状態には変わりありません。リハ分野の研究指導が可能なシニアボランティアが継続して渡秘することがベストですが、そう簡単ではないようです。国際共同研究などを行い、日秘の研究者が協力することで息の長い支援体制を作ることが必要ではないかと思っています。

日本国内における海外人材育成と支援 ～教員および留学生からの視点～

国際リハビリテーション研究会 第5回学術大会に参加して ～発表者として～

プレブドルジ デルゲルザヤール (九州中央リハビリテーション学院 介護福祉学科)

私はモンゴルから来ました。



今回は初めて国際リハビリテーション研究会第5回学術大会に参加し、「外国人介護福祉士を目指して現状の課題と報告」というテーマで一般演題発表をさせて頂きました。私自身は、人口が約3百万人で、中国とロシアに挟まれている遊牧民の国モンゴルから来日しました。モンゴルでは、まだ介護福祉の分野は発達していなく将来は高齢者の増加に伴い、介護福祉士が必要になります。

私が現在通学しています九州中央リハビリテーション学院・介護福祉学科ではベトナム、ネパール、中国らの国から留学生が介護福祉士を目指して留学しています。その一人として、本大会で同じ目的で来日しています留学生の現状と直面する課題について自分の経験から発表させて頂きました。日本は介護福祉士が不足しており、外国人の人財を必要としているのが現状です。介護福祉士を目指す留学生の現状および課題をスピークアップすることで、両者がよりお互いを理解することができればと思っています。それにより、外国人の介護福祉士が増え、日本、又は世界でリハビリテーション・介護福祉を必要とする方々が必要なケアを得ることができる環境が出来上がれば幸いです。

本大会は昨年同様、今年もオンラインで開催されました。そのため、大会の参加者と対面で話すことができませんでしたが、各セクターの専門家らの発表や研究について知ることができ、大変勉強になりました。コロナ渦の大変に時期にもかかわらず、主催者の皆さんの努力によりこのような学びの多い大会を開催されたことに感謝します。

次回、もし本大会に参加する機会がありましたら、現場で働く介護福祉士の現状と課題を伝えられたらと思います。そのためには必死に勉強して、是非来年の介護福祉士国家試験に合格したいです。



理学療法学生協会におけるこれまでの国際事業活動と今後の展望について

永尾 悠 (日本理学療法学生協会 国際部)

はじめに、この度は広田大会長をはじめ、国際リハビリテーション研究会の皆様、その他の関係者の方々に、このような貴重な機会を与えて下さったことを深く感謝申し上げます。日本理学療法学生協会(以下:JPTSA)国際部は2010年に発足して以来、約12年かけて活動を拡大させてきました。私たちは、発足当初から海外の学生との情報交換を通して、日本と海外との繋がりを深めるとともに、理学療法拡大、保護を目的として現在も活動を続けております。しかし、それらの活動を通して、日本の学生の大きな課題となるものがあります。それは、プレゼンテーション能力と英語力です。シンポジウムの中でも紹介させて頂いた、アジア理学療法学生協会(APTSA) CongressやJapan Study Tour等の活動の中で、参加国の学生がテーマに沿ってプレゼンテーションや英語でのディスカッションを行う機会があります。そこで、毎回台湾や香港などの国の学生は流暢な英語を用いて、より聞き手を魅了するようなプレゼンテーションを行います。それに対し、日本の学生は英語を用いてプレゼンテーションを行うのが精一杯であったり、英語で表現ができないために考えを主張できないという経験もありました。これらの能力は、日本の理学療法の現状や学生の考えを海外に発信するという点で欠かせないものであり、日本と海外との繋がりを深める上でも重要な能力であると考えます。そのため、現在は英語力の向上を主として、プレゼンテーション能力も身につけていけるような方法を熟考して

今後の展望

- ・JPTSA国際部メンバーの英語力の向上
- ・オンラインだからこそ可能な企画の発案
- ・JPTSA国際部の目的・目標の再確認
- ・他国との交流の拡大
- JPTSAにより他国の事を知ってもらう
- ・対面での企画の準備
- ・JPTSA国際部を後継していく



おります。また、このような状況下であるからこそ、オンラインを用いて、海外と繋がりやすくなったという現状もあります。遠方にわざわざ足を運ぶ必要がなくなったことで気軽に参加できるということもあり、より多くの学生が海外交流を図れるようになりました。しかし、対面でのコミュニケーションを行う良さもありますので、それらとの兼ね合いも含めて今後も活動を続けていく意向であります。最後になりますが、今後もJPTSA国際部は、海外との交流を通して、日本の理学療法を維持・発展していけるような存在になれるよう努めて参ります。これからもJPTSA国際部のご指導・ご支援をよろしくお願い致します。

【コラム】 『世界のめがね』

山本 啓太 (認定 NPO 法人 AAR Japan [難民を助ける会])

世界中で活動を展開している会員のめがねを通じた世界の姿を各号お届けします。今回は、カンボジア プノンペンからです。



農村部での出張会議を終え、午後の予定までしばらく時間がありました。現地職員たちに「何をして過ごそうか」と聞くと「魚を見に行こう」と言うので、私たちは大きな池のある寺院に向かいました。私は「魚を見るといっても数分で、その後は昼寝でもするのだろう」と思っていました。しかし、彼らの魚への想いは私の想像以上に大きかったのです。一人の職員がバイクでコッペパンを買いに行き、それを細かくちぎって池に放り投げる。みんなで「パッ！パッ！パッ！」と口を鳴らして魚を呼び集める。時折見える魚影に顔を見合わせて盛り上がる。しかし、私たちの期待とは裏腹に、2本分のコッペパンは一つも食べられない。寂しく漂うパンのかけらを眺めること40分。ようやくその一つが食べられ、私たちの魚観察は終了。久々にのんびりとした時間を過ごし、海外生活の良さを実感する出来事でした。

【お知らせ】

【ウェブページがオープンしました】

国際リハ研究会のウェブページがオープンしました！ <https://int-rehabil.jp/>

【国際リハビリテーション学第4巻を郵送しました】

2022年1月下旬に会員の皆様全員に「国際リハビリテーション学第4巻」を冊子体で郵送しました。未着の方は事務局までご連絡ください。

【登録情報に関するお願い】

会員登録情報に変更のある方は事務局までご連絡ください。事務局連絡先： jsir.office@int-rehabil.jp

【年会費お支払いのお願い】

2021年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、下記の口座まで年会費のご入金をお願いいたします。

銀行名：ゆうちょ銀行 口座名義：国際リハビリテーション研究会 記号：10540 番号：83410731 他金融機関から振り込む場合 店名：0五八(ゼロゴハチ) 店番：058 預金種目：普通預金 口座番号：8341073 ※振込者名と会員名を同じにしてください。

Access →
[JSIR HP]



編集後記

改めて様々な立場の皆様の活動を拝聴でき学びの多い学会でした。ある講師の先生が「集まるのが大切」と質問にご回答されましたが非常に共感しました。次回も楽しみにしています。(古川 雅一)

国際リハの「変化と深化」について多様に学ぶことができました。こういった繋がりから新しい関係性や取り組みによって国際協力がはじまっていると感じました。本年もよろしくお願い致します！(三田村 徳)

事務局 編集担当

古川 雅一 (仙台医健・スポーツ専門学校)
長田 真弥 (姉ヶ崎ケアセンター)
三田村 徳 (東北医科薬科大学病院)

大西 海斗 (コーエイリサーチ&コンサルティング)
高橋 恵里 (東北福祉大学健康科学部)
山口 佳小里 (国立保健医療科学院)

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/>

国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

